

九月総評 立花開

踏み込めばパリリと割れる薄氷の  
関係でしたさよなライオン

杉本 太 神奈川県

近づきたかったが、それを許さない相手だったのだろう。近づけば深刻な空気になってしまいうから、せめて今の距離だけでも守りたかった。話し合って終わったものより、触れられず壊れた関係の方がいつまでも心に刺さる。道化のような軽やかな別れの言葉を言うしかない心が一人になったとき、初めて泣けるのかもしれない。

祈っているあなたにかける

グラニュー糖

桜庭 紀子 和歌山県

「祈り」という甘やかな行為。人が思いを叶えるための力にもなるし、祈ってさえいれば良いという思考停止の場に縫い止め、可能性を奪いもする。主体の祈りに対する価値観は後者なのだろう。信じて祈る「あなた」に対しさらに甘くなるようなグラニュー糖をふりかける。その目はとても冷たい。

晴れ間には

音符のようにシャツを干す

飛和 長野県

「晴れ間」とは、その日の天気にも、主体の人生にも読み取れる。風が豊かに吹くなかにシャツを干す。その場ではためくシャツと、その向こうで押し流されていく白い雲が見える。滑らかに流れていく穏やかな時間の中で、作曲家の書いた音符のように不可欠な存在として無造作に美しくそこにある。

流れ星家族になるはずだったひと

木村 菜智

宮城県

自分がそう思い込んでいたのか、互いに思っていたがそこに至らなかったか、もしくは一

度家族になったが離れる道を選んだか。何にせよ、生涯を生きたかった人との別れは、ひとつの死だ。「なるはずだった」に今なお信じられない現実なのだと感じる。けれど、生きていかねばならない。

遠雷をこわがらないで

ほんとうの雨は

書物の中にだけ降る

山野ゆかり 東京都

この世で起きることは、すべて借り物の中の出来事でしかない。だから、悲しまなくてもこわがらなくてもいい。遠雷もまた、この世でしか起きないことだから、「ほんとう」ではない。けれど、「ほんとう」ではない世で創り上げられた書物の中の雨は、「ほんとう」なのだろうか。何もかもが無で、雨だけがそこに在る。そんな心地がしてくる。

ふるさとの海岸線を点々と風車、

まち針抜けばほどけて

牧角うら 東京都

ふるさとは、そこを離れた瞬間から徐々に作られたものに変容していく。思い出が何重にも被さり、本来の姿が見えない。風車がまち針のように見えるほどの距離。心も体も遠く離れた場所にて、その淋しさからいたずらにまち針を抜けば、ふるさは崩れ消えていく。誰もがいつかは心の中の帰る場所を見失い、どこかに帰りたくて堪らない大人を生きていく。

生ゴミの日に未練を捨てる

一の橋 世京 埼玉県

「生ゴミの日」は広く一般的には可燃ゴミの日のことだが、あえて生ゴミの日と括弧ことに主体の強烈な思いが見える。本当はまだ未練があり、捨てたくない。燃やすことはできないような水気を滴らせながら、思いを捨てる。

冬瓜に高い高いをして淋し

千坂希妙 大阪府

大きな冬瓜を両腕で抱えると、赤ん坊を抱いているように感じた。子どもが欲しい、高い高いをしてやりたい、抱きしめたい。その純な思いが行動として赤ん坊以外に向けられたとき、なぜこんなにも悲しいのだろうか。自分でもわかっているのだ。持ち上げられた冬瓜の向こうの空がより寒くなることも自身の姿が人には見せられないことも。

胸に抱く

吾子があの時

つぶやいた

「いいのにおい」の

「の」をしまう箱

葉月ままこ 福岡県

子どもの言い間違いは愛らしい。いつまでも言い続けてほしいが、成長に従ってほとんどが修正されてしまう。言い間違いを聞いていた周りの大人だけが、いつまでも大切に覚えていたものだ。箱から「の」を取り出し触れると、きつとすべすべとして温かいのだと思う。吾子の幼少期の頬のような触り心地の「の」が大切に仕舞われている。

もう旅はやめてしまった

秋になると

正方形の手紙がとどく

橘しとら 神奈川県

昔大切にしても、いつの間にか頻度が落ちたり気が付いたら忘れたまま過ごしていたりするものだ。けれどその時救われたり楽しんだ心は自分の中で輝き続ける。「正方形の手紙」という、異界との回路のような美しい存在が届く。差出元は自身の心ではないか、と思う。旅を楽しみ、慈しんでいたときの心が今の主体に届ける。